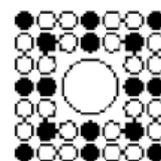


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 22

December 31, 2005



BCJA 奨学基金からの御礼

謹啓

BCJA 奨学基金にご賛同賜り、早速にお振込みの件、御礼申し上げます。

有為な青年諸君が、BCJA 奨学金を一助として、将来の日英関係の架け橋になってくれることを、心から期待したいものです。改めて、御礼申し上げます。

謹白

BCJA 会長 橋都浩平

奨学金授与者リストを見ていただければと思いますが、出身大学や専門領域を意図的に操作したわけではなく、結果的に偏りは生じていないと思います。評価基準は各委員に一任していますが、どんなに優秀な経歴や業績があってもピーターパン症候群や資格や経歴のための応募のようになってしまっているような場合がうまくフィルターにかけられていると感じました。小額の奨学金にもかかわらず、問い合わせも多く、優秀な方々が多数応募されることを考えますと、やはり今後も何らかの形でこの制度を継続・発展させていきたいと考えております。会員の皆様のあたたかいご支援を今後ともよろしくお願い申し上げます。

2005 年度 BCJA 奨学生選考について

BCJA 奨学生選考委員長 平 孝臣

BCJA 奨学生制度の発足当時からこの企画に関与してまいりましたが、2005 年度から選考委員長という大役を務めさせていただくことになりました。今振り返りますと、自分自身が BC Scholarship を受験し英国留学を果たせたことがその後の人生に大きく影響しており、もし Scholarship が受けられなかったらその後の人生が全く変わっていたのではと痛感しています。この意味で、逆に BCJA 奨学生を選考するという立場は、応募される方々の人生を大きく変えてしまうような恐れ多いことをしているのだと考え、責任の重さをひしひしと感じております。

2005 年度は 99 名の応募があり最終的に 10 名の奨学生を選考いたしました。全体の印象としましては、応募された方々全員が非常に優秀な方々ばかりで、この疲弊した日本社会の中にも、将来の日本を担ってくれる明るく優秀な若者がこんなにたくさんいるのだという念を強くしたことです。選考は公平を期すべく 5 名の選考委員が他者の採点に影響されることのないように配慮し独立して 5 段階評価を行い 25 点満点で集計しました。合格者は 21-22 点で占められています。

不思議なことに各委員の意見はほとんどバラけることなくすんなりと決まりました。奨学生の詳細につきましては

2005 年度奨学金授与者リスト

姓 名	留学先研究機関	研究分野	所属/出身校
萩原 百合子	London School of Hygien and Tropical Medicine	疫学	東京大学
伊藤 史彰	Queen's College, Oxford	有機化学	早稲田大学
斉木 臣二	Univ of Cambridge	医療遺伝学	京都府立医科大学
今井 敏子	Institute of Psychiatry at the Maudsley	小児精神医学	日本医科大学
大牟禮 宏美	Univ. of Cambridge	政治学	神戸市外国語大学
高野 良太郎	Univ of Sussex	科学技術政策	国際基督教大学
岡部 めぐみ	Univ. of Oxford	応用言語学	慶應義塾大学 Stanford Univ
伏見 香名子	Univ of Scheffield	ジャーナリズム	国際基督教大学
吉田 林	Univ of Scheffield	生物医学	上智大学 慶應義塾大学
増田 史子	Keble College, Univ. of Oxford	国際商法	京都大学

2002年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

「英国留学レポート：ヨークでの研究生生活を終えるにあたって」

秦 邦生

私がBCJA奨学金を頂き、英国の北方ヨークにおける長期留学へと旅立ったのは、今からすでに3年以上も前、2002年の秋のことになります。当時を振り返ってまずなによりも思い出されるのは、留学1年目の冬のある出来事です。2003年2月、ヨークに滞在中だった私は、突然日本の両親からの電話にて祖母の訃報に接しました。祖母はその4、5年前から既に重度の痴呆障害で、長く地元の特別養護老人ホームにお世話になっていましたが、身体的には健康だったので私たち家族にとっては予想外の急な逝去でした。その年の冬は日本でも英国においてもとても寒く、祖母の訃報に接したその日もヨークでは例年にないほどの大雪が降っていました。まだ学期中だったこともあり、日本の両親は葬儀のために帰ってこなくても良いと言ってくれましたが、私としてはやはり葬儀には参列したいと思い、急遽2日後の朝の飛行機を予約しました。その出発の朝も、前夜道路に降り積もった雪が凍りつき鉄道の駅に向かうタクシーですら滑りながらゆっくり、ゆっくりと走るようなありさまでしたが、それでも半日後にはなんとか無事に日本にたどり着き、奇跡的に葬儀の時刻にも間に合う結果になりました。

現在から振り返るとこの1回目の帰国は私の英国留学における初めての転機だったように思えます。私のヨーク大学への留学は博士論文執筆のため、最短でも3年という長期間を予想したものでしたが、はじめのころは気負いと生活の不慣れもあって思うような研究ができず、やや鬱々とした日々を送っていました。そんな中での祖母の逝去と大雪の中の帰国は、もちろん肉親を亡くした悲しみもありましたが、同時に、自分なりのけじめをつけられたという安堵と、急な事態にも対処できたという自信を私に与えてくれました。その際の日本滞在は1週間程度とごく短いものでしたが、この帰国の後は、ヨークでの留学生生活を新しい気持ちで再開することができたように思います。留学1年目の余裕があるとは言えない予算からでも、この時の帰国費用をなんとか捻出できたのもBCJA奨学金のおかげでした。この場を借りて感謝を表させていただきたいと思います。本当にありがとうございます。

私にとってヨークで過ごす冬は今回で4度目になるわけですが、その時ほどの大雪に見舞われたことはその後ついぞありません。雪の話から入ったのでヨークはどれほど寒いところか、という印象を与えたかもしれません。ですが、ヨークはイングランドの北方、ヨークシャーの中心地ではありますが、さらに北のスコットランドの境まではまだだいぶ距離があります。しかも、低地に位置しているおかげで（しばしば洪水には悩まされるものの）ヨークシャーの他の地域よりは毎年の積雪も少なく、過ごしやすい土地柄です。特にこちらの夏は日本の猛暑に比べるとちょうど心地よい日和が続きますので、留学以来夏に帰国したことは

一度もありません。2つの河川が交差する地点に位置するこの街は古い交通の要衝で、かつてローマ人が砦を築き、ヴァイキングの首都だったこともあります。19世紀に鉄道が敷かれてからもちょうどロンドン—エジンバラという2つの首都をつなぐ路線の中間地点として機能しましたが、産業革命の波には取り残され現在では主に大聖堂を中心とした小綺麗な観光都市として栄えています。

このような伝統ある街に位置するヨーク大学は、意外にも創設以来わずか40年余りというとても若々しい大学ながらもその実績面ではかなり健闘しています。毎年発表される新聞社の英国大学ランキングでは常に10位以内に入っていますし、教育の質だけに限れば2、3位に置かれていることもあります。私が所属しておりました英文学科はなかでも有力学科で、2001年の審査では最高の5*の評価を受けた数少ない大学の1つでした。ヨークの街そのものは白人居住者の多い典型的な英国の地方都市ですが、いったん大学のキャンパスに足を踏み入れれば、さまざまの国籍を持つ大学院生たちに出会うことができます。特に私は最初の数年間大学の寮に住んでおりましたので、英国の地元出身の学生たちはもとより、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、中近東、そしてアジアと、さまざまな地域から、それぞれの目的を持ってヨークへやってきた学生たちと親交を暖めることができました。日本人の留学生仲間でも、同じ英文学専攻の院生だけではなく日本ではなかなか出会うことができない他分野、たとえば政治、経済、歴史、環境学などの研究者たちと友人になり、自分たちの専門知識を出し合いながら夜通し語り合ったことも良き思い出のひとつです。

そんなヨークでの私の留学生活にも、そろそろ一定の区切りをつけるべき時期が近づいてきています。私の研究対象は19世紀末から20世紀前半までの英国文学です。当時の英国では、1871年の教育法施行後の識字率の急激な上昇と、印刷・流通技術の大幅な改善ともなって、新聞、雑誌、そして出版が巨大市場を持った近代的大規模産業へと成長していました。こうした傾向は、一方では文化と知識の民主化として賛美・礼賛されていたものの、その他方では規範的な社会道徳の退廃や伝統的な文化の商業化をもたらすものとして激しい批判にも曝されていました。私たちは、現代的なマス・カルチャーやマス・メディアの1つの祖形をここに見ることが出来るのですが、この時代の逆説的な発展は、文学や芸術の分野において高度に複雑な形式と過度に難解な内容を持ったさまざまな作品、現在では「モダニズム（近代主義）」と総称されている潮流を生み出しました。

私の論文はこのモダニズムの諸作品の理解を試みたものです。そこで私が、直接的にも間接的にも常に問いかけ考えていたのは、現代社会において芸術や文学の果たす公的な役割とはなんだろうか、という大きな疑問でした。もし近代という時代が私たちにもたらしたのが、たとえば政治、経済、科学技術など、従来は1つに融合していた諸分野の分断と専門職化であったとしたら、過度に複雑化して一部の人々にしか理解できないような芸術は、同じ「専門化」という近代の徴候を呈しているだけなのではないでしょうか。ある

いは、出版の大規模産業化は退廃的な商業化であるという当時の批判がもし正しいとしたら、大衆とは内容の高度化により距離を取ったモダニズムは、単に金銭的な交換には還元できない文化や社会関係の理想を追求していたのでしょうか。このような問題は一般的な解答を見出せるものではなく、粘り強い考察と資料探究によってあくまでも個別的・具体的に検討されるべきものでしょう。ヨーク大学での私の研究を指導していただいたロレンス・レイニー教授はモダニズムを対象にしてこうした問題に取り組んでいる学者のなかでも第一人者にあたります。ヨークという街の静かで伝統ある環境のなかで、英国での最新の研究成果を参照しつつ自らの疑問いに答えを見出そうとした3年間は、これからの私の研究者としての活動にきっと生きてゆくことだと思えます。

私の疑問への解答は正直まだ見つかっていませんし、答えを出すのは時期尚早というものでしょう。ですが、現段階で少なくとも言えると思うのは（あまりにも当然に響くかもしれませんが）、どんな問題にも歴史的な経緯があるという点と、複雑なものを安易に単純化することはできない、ということです。近代の文学や芸術は、一見してどれほど秘教的な難解さで身を固めていたとしても、不可避的には常により大きな文化史の政治的・経済的ダイナミズムに巻き込まれています。たとえば身近な例になりますが、私の学んだ街、ヨークは古くから発達した宗教都市として現在でも白人、特に高齢者の多い街です。しかし大都会ロンドンやヨークの隣町のリーズなど、19世紀の産業革命以降に大発展を遂げた都市に一步でも踏み込めば、現代の多様化した英国の真の姿、つまり、その多文化社会としての在り様を目の当たりにすることになります。もしも近代のもたらしたのがさまざまな分野の分断と専門化であるという説が一面の真実であるとしても、同時に起こったのは伝達と交通の革新にともなうさまざまな地域や文化間の発展的混交と、付随して立ち現れた衝突や摩擦なのです。私としてはヨーク大学で知り合った友人達の国籍を数え上げるだけでも、私たちのような留学生たち自身の交わりも、こうした文化混交過程の現代における重要な一部であることを思い起こすのに十分です。このような文化の複雑化が将来のさらなる摩擦ではなく、なんらかの形で平和的な相互理解へと貢献することを願ってやみません。最後になりましたがBCJAの皆さまの更なるご発展をお祈りしてこの報告を終えさせていただきます。あらためてありがとうございます。

(2002年度BCJA奨学生、University of York、英文学)

2004年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[1]

BCJA 留学報告記

川崎 隆士

C.E.A. Winslowによれば、公衆衛生学とは「組織された地域社会の努力を通して、疫病を予防し、生命を延長し、身体的・精神的健康の増進をはかる科学、技術である。」と

定義しています(1949年)。日本では医学の一部として考えられている公衆衛生学ですが、医学や衛生学、保健学だけでなく、社会や経済、行政、環境など多岐にわたる領域に関わり、その意義、役割が年々増えています。最近の例では、鳥インフルエンザや結核などの感染症対策や、アスベスト取り扱い工場近隣住民への健康影響に関する疫学調査など、公衆衛生学は環境保健、疫病予防、健康教育、健康管理、精神保健、福祉、衛生行政、医療制度、社会保障などと密接に結びついています。大きな特徴的として、いわゆる臨床医学が対象とするのが患者個人であるのに対して、公衆衛生学では個人よりも集団や社会を主な対象としている点です。その対象となるカテゴリーには、母子、成人、老人などが国際社会、学校、地域、産業などがありその対象分野も拡大傾向にあります。そうした公衆衛生学の多様化に対応すべく、公衆衛生を専門に教育研究する機関として、公衆衛生大学院 (School of Public Health)があります。

London School of Hygiene & Tropical Medicine(LSHTM)は、1899年に設立された公衆衛生学と熱帯医療の専門大学です。もともと植民地政策の一環として熱帯医学の教育研究を行うために設立されるも、植民地の減少とともに国内外の公衆衛生学の教育研究を主体とするようになり、英国および欧州圏におけるパブリックヘルス教育研究のメッカとなっています。アフリカやアジアへの保健医療のコンサルティング、トレーニングや研究活動も盛んに行われています。プログラムによって入学資格条件は違いますが、公衆衛生学、保健政策、人口学、ヘルスプロモーション、ヘルスサービス管理、栄養学、リプロダクティブヘルス、疫学コースなどについては、医療従事者(医師、看護師など)だけでなく、社会科学や自然科学のバックグラウンドを持つ学生も受け入れています。

私は、2004年9月から2005年8月までの約1年間、MScコースのPublic Healthに在籍しました。2004年度の修士コースには、570名の生徒が参加し、そのうち320名がEUより、250名がその他の100カ国を越える世界各地より集まりました。また、地理的・経済的理由からロンドンでの勉強が困難な学生のため設置されたDistance Learning遠隔地教育コースには、300名を越える学生が参加しました。同級生の中には、医師が約3分の1で、その他看護師、獣医師、生物学者、医療経済学者、社会学者がおり、年代も大学を卒業した後の20代前半から、家族総出で留学に来た40代の方までバラエティに富んでいました。2004年度のLSHTMのマスターコースは、公衆衛生学に関連したものが25以上もあり、厳密なPublic Healthだけでも、General, Environmental & Health, Health Promotion, Health Services Management, Health Services Researchの5つのストリームに分かれます。これは、2003年度までは、Public Health1つのコースであったのが、時代の変化・ニーズに合わせて、コースが細分化されました。ただし、コースタームは3期に分かれ、ターム1は疫学、医療経済学、統計学など基礎科目のため、ストリームを選択する必要はなく、ターム1の中期に同級生、担当教官と相談しながら、自分の将来を見据えて選択することになります。私は、Public Healthを

全般的かつ体系的に学びたいと思っていたので、迷わず、**General Public Health** のストリームを選択しました。

実際にコースが始まってみると、LSHTM は、学生数に対する教授、講師陣の質・量ともに充実していることに驚きました。各科目は講義とディスカッションを中心としたスモールグループティーチングがほぼ対となり、学生参加式の密度の高い授業が行われました。昼休みや夕方にも保健、医療、公衆衛生に関連したセミナーが、頻繁に催されており、興味深いものを選択して聴講しました。ターム2からは、より専門的な科目が始まり選択科目となるため、各自のバックグラウンドと将来のキャリア構築に合わせた教科を学ぶことができました。また、この頃になると、修士論文作成のためのテーマ決めを各自のチューターを相談しながら決めていきます。多くの学生は、自国の公衆衛生に関連したテーマに取り組み、6月末の試験終了後にデータ収集の目的でフィールドワークのため世界各地に散らばって行きます。私のテーマは、「Health impact of interventions on smoking habit and diseases related tobacco exposure in Japan」で たばこの実害が問題となってきた1960年代から最近までの日本のたばこ政策に焦点をあて、たばこ関連性疾患とくに肺腫瘍に対するインパクトを評価しました。これは、日英たばこ政策の比較合同研究の一部であり、同時期に他学生が英国のたばこ政策に焦点を当て同様の研究を行っていました。

この一年間は、月並みな言葉ですが、あっという間に過ぎ去りました。LSHTM において、これから世界に散っていく、公衆衛生の第一線で活躍していくであろう彼女らと本当に充実した時間を過ごせたことが信じられないくらいに幸運なことだったと思えます。稿を終えるにあたり、留学の機会を与えていただきました大学をはじめとする関係各位、奨学金を給付して頂きました **British Council Association Japan** 様に厚く御礼を申し上げます。

(2004年度 BCJA 奨学生、London School of Hygiene、公衆衛生)

2004年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[2]

BCJA 留学レポート

大崎 晴美

私は現在イギリスのエディンバラ大学神学部にて在学しています。といっても、牧師になるための勉強をしているわけではなく、ある一人の哲学者の思想を中心に、現代フランス哲学とキリスト教の関係性を研究しています。フランスの哲学を研究するのにイギリスにいるというのは奇妙な話かもしれませんが、一方でキリスト教の神学について学びつつ、他方でそれに対する現代哲学の側からの批判や挑戦を検討するという両方の作業ができる場所がなかなか見つからず、最終的に行き着いたのがここだったので。学生の中にはいろいろな国から来たいろいろな人達がいまいます。神学部と言えはすぐに思い浮かぶような、牧師や伝道師になるために来ている人達だけでなく、純粋に学問の対象として世界の様々な宗教を研究している人達、また、哲

学や文学や文化論等、研究の主な対象は宗教ではないけれど、部分的に宗教が絡んでくるためにここに来ている人達もいます(私もこの中に属します)。お互いの文化や宗教あるいは信条(無宗教も含む)の多様性を認め合うという大前提はあるものの、現実にはなかなか理想どおりにはいきません。いろいろな国からいろいろな人達が集まっている以上、宗教間の対立や国家間の対立という深刻な問題と全く無関係ではいられないような局面も出てきます。それでも、いろいろな人達が立場の違いを超えてお互いを受け入れ共存している、とても不思議な空間がここにはあります。

スコットランドは、同じイギリスとはいっても、イングランドとは異なる独自の文化や伝統を持ち、またそれをとっても大切にしている気風のある地域です。歴史上イングランドと長い対立関係にあったこともあり、イングランドとは別の国だという意識を持っている人も多く、ワールドカップにイングランドのサッカーチームが出ては応援しません。自分の生まれ故郷を愛し独自の文化や伝統を大切にする、そのこと自体はとりたてて悪いことではないのですが、悲しいことに、時としてそれが他の地域や国、他の文化に対する排外主義につながってしまうこともあります。イングランドの人々とスコットランドの人々の間の確執には根深いものがあり、今でもなお深刻な問題の一つです。

エディンバラは観光地として有名で、市内にはお城や教会等の古い建物が昔そのままの姿で残っています。街の中心部には近代的な建物もありますが、大学、博物館、図書館といった公共の建造物だけでなく普通のお店や民家でも、何百年も前に作られた古い建物を改修しながらそのまま使っている場合がとて多いです。これも伝統を大切にするスコットランドの気風をよく表しています。そのため、わざわざ観光ツアーに出かけなくても、街中を少し歩くだけでも、古都のたたずまいを楽しむことができます。

スコットランドの英語は、かなりなまりがきつい上に独特の方言もあるので、外から来た人間にはかなり聞き取りにくいです。同じ英語を話すアメリカ人の中にさえ、最初は相手が何をしゃべっているか全く分からなかったという人もいます。大学や公共施設等ではそれほどでもありませんが、一歩その外に出ると、特に街の中心部から離れるにつれて、なまりがきつくなる傾向があるようです。観光に来られる方、また、これから留学を考えておられる方はその点どうぞご留意下さい。スコットランドだけでなく、イギリス各地の特色のある方言を紹介する本も出版されているようなので、そういったものにあらかじめ目を通しておかれると少しは参考になるかもしれません。

日本では学生の生活とさえ一人暮らしが普通ですが、こちらではそれはごくまれです。一人暮らしという生活パターン自体があまり一般的ではないため、そういう物件もあまりなく、あっても家賃がかなり高い場合が多いのです。ではどうするかと言うと、部屋がいくつもある一つのフラットを何人かで借りて共同で生活する、いわゆる「シェア」をするわけです。生活習慣や嗜好が違う人間同士が会っていきなり一緒に暮らし始めるわけですから、当然お互いの間で食い違いが起こってくる可能性があります。パーティーを開いて人を呼んで騒いだり、ボリュームを上げて音楽

をかけたりの好きな人と、自分の部屋で静かに勉強したいという人とか、同じ場所でうまく生活できるわけはありません。時には、台所やバスルーム等の共有スペースに置いている他人の食べ物や持ち物を勝手に使っても何とも思わない人もいます。そういう人は、逆に相手に自分の物を使われても何とも思わない場合が多々あるのですが、自分の物は自分の物、他人の物は他人の物というけじめをきちんとつけたい人であれば、やはりどうしても気になりますよね。どういう生活をしたいのか、生活の中で何を重視したいのか、そういったことに関する価値観を共有できる、自分に合ったフラットメイトを見つけることが、シェアをうまく成功させるためのポイントです。

最後に、私の狭い体験からではありますが、留学を考えておられる方に部屋探しについて一言お伝えしておきたいことがあります。フラットや部屋を自分の目で見て、家主やシェアする人と実際に会って話すことはもちろんですが、土地勘のある人に話を聞くか一緒に来てもらうかして、フラットのある地域が安全な地域かどうか確認することを是非お勧めします。私は最初の引越しの時に、何の予備知識もない状態で一人で動いて、その結果、それと知らずに治安の悪い地域にある部屋を借りてしまいました。それは地元の人なら誰でも知っていることだったのですが、不動産屋の広告にはそんなことは一言も書かれておらず、堂々と「学生向き」のマークがついていました。引越し直後から隣人トラブルが相次いだ上に、近所に犯罪者までいることが分かり、幸い大事には至らなかったものの、身の危険を感じたり怖い思いをしたりしたことが何度もありました。法律に従って引越しをしたと不動産屋に言っても、のらくらと言いつつ逃れをされてまともに取り合ってもらえず、結局大学の職員の方の助けを借りて交渉にこぎつけ、やっとそこを出ることができました。その国や地域のことを知らずにやってくる留学生に対して、すべての業者、すべての人が必ずしも良心的なわけではありません。被害を訴えても、知っていて当然のことを知らずにだまされる方が悪いのだと居直るような悪質な人達もたくさんいます。だから、自分の身は自分で守るしかありません。避けられるトラブルは事前に避けるためにも、その土地をよく知る人から情報を得ることはとても重要です。そして、もしトラブルに陥ってしまって、自分や友達だけでは対処できない場合、大学には留学生課や相談窓口等が必ずあり、場合によっては学生組合が助けてくれることもあります。信頼できる人達もいます。一人で抱え込まずに、頼れる人達を見つけて下さい。

(2004年度 BCJA 奨学生、University of Edinburgh、神学)

2004年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[3]

ロンドンでの留学を終えて

中江郁子

昨年度のBCJA奨学金を頂きましたことについてまずお礼を申し上げたいと思います。ここでは、私の所属しておりましたコースの内容及び大学について、そして留学中の

生活について簡略ですがご報告さしあげます。

私は2004年10月より1年間、London School of Economics and Political Science (以下LSE)のLLM(法学修士)課程で国際法を学びました。このコースでは1年間通して4科目受講し、その中の1つを選んで修士論文を書くということになっています。LLM自体は数十もの科目が提供される大所帯のコースですが、多くの学生は法律の特定分野を専攻しその分野に関連する科目を選択するため、自然と授業には同じ顔ぶれが集まるということになります。私が留学先として英国、そしてLSEを選んだ理由は、英国の法学教育は法を社会科学の一分野としてとらえるアプローチをとっていることに惹かれたため、そしてLSEは社会科学的研究において名高く又国際法分野で非常に優れた教授陣が揃っているためですが、その選択は間違いではなかったと思っています。

具体的な学業の話に移りますと、私は国際刑事法、武力紛争法、国際難民法、国際法：理論と実践という4科目を選択していました。この選択は、伝統的な国際法は国と国との関係を規律するものですが、私の問題関心はむしろ個人を対象とする国際法にあることから来ています。たとえば武力紛争下において非戦闘員をどうやって保護するか、ジェノサイドのような国際法上の犯罪を行った個人をいかに裁くか、という点についても現在の国際法は規律するようになっています。しかし、これに対し国家主権という制約は依然として存在しており、国際法が実際にどの程度まで踏み込めるのかというのは難しい問題です。また、LLMの4科目に加えてLanguage Centreで行われるフランス語も取っていましたが、ここでのクラスメートは一転して学部生、ロンドン大学の他のカレッジの学生、LSEの講師までバラエティに富んでおり交友関係を広げることにもなりました。

次にLSEという大学については、「国際的」という表現が正にぴったりくるどころ、という印象です。留学前は、学生の半数以上が留学生であるということの具体的なイメージが思い浮かばなかったのですが、これは結果的に私の留学生生活を非常に豊かにしてくれました。まず、世界の様々な法体系を学んだ学生がクラスに存在していることはディスカッションを盛り多きものにしてくれます。又、私の専攻が国際法であることから、たとえば旧ユーゴスラヴィアやイスラエル出身の学生と友人になることはそれらの地域で起こっている問題を実際にその地に住む彼らがどうとらえているかを知る機会ともなりました。そのような多様性に加え、LSEのもう一つの大きな魅力は、著名人による講演会を頻繁に開催していることです。本当ならば毎日でも聴講に行きたいところでしたが、授業の準備などの時間的制約から見送ってしまったものも多いというのが正直な感想です。

留学中の生活につきましては、平日は勉強中心でしたが週末には友人宅でのパーティーや観劇などの機会もありました。大きなイベントとしては、LSEからほど近いチャンセリーレーンのRenaissance Hotelで5月にLLM Ballが開催され、日頃見慣れたクラスメートたちが一変して正装で着飾った姿や、加えてお世話になっている教授たちがダンス

を踊っている姿を見る事が出来たのも良い思い出です。そして、試験終了後には国際司法裁判所や国際刑事裁判所が所在するオランダのハーグに study trip に行きました。これは元々学部により用意された旅行ではなくクラスメートが企画したものです。彼女たちが学部長と交渉した結果、参加者一人当たり約半額の補助が出、また単に裁判所を訪れるのみならず裁判官や検察官の方々のお話を聞くためのコンタクトを学部長が直接とって下さることになり、まず交渉ありき、という態度はやはり日本の学生とはひと味違うものと感じました。そして実際に国際司法裁判所を訪れた折に当の学部長が国際司法裁判所において弁論をなさっており、LSE の教授陣が学問のみならず実務とも深く関わっていることを実感させられました。

7 月初旬にはロンドンで地下鉄・バスの同時多発テロという悲しい事件もあり、このことは多様な国際社会をどこまで力でなく法で規律出来るのかという問いをも想起させましたが、そのようなことも含めロンドンでの 1 年は私にとって非常に大きな影響を与えてくれるものでした。現在は東京大学大学院に復学し、勉強を続けています。最後に、ご支援下さりました会員の皆様に対し、再びお礼を申し上げることで終わりしたいと思います。本当にありがとうございました。

(2004 年度 BCJA 奨学生、LSE、国際法)

2004 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[4]

オックスフォードにて

田中麻希

早いものでオックスフォードに来てからもう一年三ヶ月が過ぎようとしています。私の研究テーマは国際法の形成過程で、法学と社会科学の学際研究での博士号の取得を目指して法社会学研究所で研究を続けています。従来、国際条約の草案策定に関しては、内容の専門性や国際法上の制約で各国の政府関係者によってのみ行われるものであるとの考え方が主流であったのですが、近年では市民団体や当事者の参加の機会を設けることが多くなってきました。また、学問の上でも国際条約の策定に際しての説明責任という観点からこの分野での研究の必要性が高まっています。私の博士論文では、現在国際交渉の行われている障害者の権利条約の策定過程を事例として取り上げて、実際にどのような形で非政府関係者が国際条約の草案づくりにかかわっているのかを調べることにしています。法学では国際条約の草案は法解釈の補足的な手段として位置づけられているため、草案の形成過程に関する研究はあまり進められてきませんでした。私の博士論文では、社会科学の実証研究の手法を取り入れて条約の草案形成過程に焦点を当てることにしています。博士課程の一年目を研究テーマの絞り込みに費やしたため、二年目の第一学期になってようやく研究計画書と博士論文の第一章の草稿を学部の内部審査に提出し終えたところです。学外での研究活動では、夏期休暇中に国際学会で研究発表したほか、英国法社会学会の大学

院生会員代表にも任命されました。

博士課程研究以外では、今年の 10 月から国際公法の少数者チューターによる学部生の授業を担当しています。授業中、学生は熱心に今日の国際法上の問題を討議します。彼らの新鮮な意見にはっとさせられることも度々ありました。米国と英国の政府レベルでの蜜月からすると意外なのですが、学生の授業での発言を聞いていると彼らがかかなり米国の国際政策や国際法上の取り組みに批判的であることが伺えます。武力行使に関する授業では、ブレア政権がイラク侵攻に加わったことに関して一体どのような法的根拠があるのかと真剣に問う学生たち。熱意ある学生の質問にきちんと答えられるようにと教える私も毎回必死になって授業の準備をしました。そんなわけで、私にとっても国際公法について学ぶことの多い学期となりました。さらに来学期からはオックスフォード国際公法ディスカッショングループの世話役として、講演者の選定や招聘をすることにもなっており、こちらのほうでもさらに学ぶことが増えそうです。

ところで、私のいる法社会学研究所は 2004 年に建てられたばかりの社会科学研究棟の中にあります。オックスフォードには築何百年の古い建造物が散在しているのですが、ガラスとコンクリートによる白と黒を基調とした研究棟の建物はその中では異彩を放っています。研究所の中は、窓際に教官用の個室の研究室が並び、真ん中のオープンスペースが大学院生と交流研究生の共用の研究室として使われています。共用とはいえ、一人一人に机とコンピュータとロッカーが与えられているため、研究環境はまずまずで、私は学期中はほぼ毎日研究室で作業しています。また、研究所の一角には休憩スペースがあり、ソファとテーブルに加えて冷蔵庫と電子レンジと湯沸しポットが備えてあってなかなか居心地もよく、自然と院生や研究生が研究所で過ごす時間が長くなります。そのおかげで、出身国も研究テーマも多様な 7 人の同期生は皆すっかり打ち解け、気軽に研究の相談をしたりホームパーティーを楽しんだりしています。これまでのことで特に印象深いのは、昨年研究生の一人が結婚することになり、研究所の中でささやかなお祝いパーティーをしたときのことです。当人には研究所の事務手続きに関する会議があるから研究手法の講義の後に会議室に行くようにと言っておき、同期生全員で密かに会議室にシャンペンとカードを用意して待っていました。内緒で婚約者まで呼んでおいたので、当人は本当にびっくりし、その様子がおかしくて教官数名も加わったパーティーは大いに盛り上がりました。

オックスフォード大学はカレッジの連合によって成り立っているため、大学院生は大学の学部のほかにカレッジにも籍を置きます。私は大学院生専用のカレッジであるウルフソンに所属しています。大学院生の場合、研究支援は主に大学の学部を通して行われるのですが、学生生活の支援は主にカレッジが担当しています。ウルフソンは比較的新しいカレッジで、オックスフォード市街の中心から少し離れた閑静なエリアに建っています。カレッジの建物は 70 年代の近代建築で、チャーウェル川をはさんで向こう岸には牧草地が広がっています。去年はカレッジの寮の 3 階に

住んでいたのも、毎日大きなガラス窓越しに川面に浮かぶ水鳥と牧草地ののどかな風景を一望というちょっと贅沢な暮らしをしていました。私は自転車が悪手なのでカレッジから研究所まで最短でも 20 分の道のりを歩いて通っていました。ちょっと遠回りになるのですが、カレッジから牧草地と公園を突っ切っていくトレイルがあり、珍しく晴れた日にはそのトレイルを歩いて研究所に通うこともありました。今は市街地の方に引越し、社会人3名と一般住宅での共同生活をしています。食事のほうは、米国留学時代もそうだったのですが、頑固に自炊を続けています。ただ、米国の首都ワシントンにいたころとは異なり、オックスフォードにある中華系商店ではまともな日本食材が手に入りやすいのと値が張るので少々苦労しています。

カレッジは大学寮だけではなく、学部のカレッジを超えた社交の場も提供しています。それぞれのカレッジが専用のパブやジムを備えており、クラブ活動も盛んです。ウルフソン・カレッジも例外ではありません。特に、体道部は英国唯一とのこと。残念ながら私には武道の素養がありませんので、アウトドアの会に加わりました。これまでに、会のメンバーと共に湖水地方で登山したり、ダートモア国立公園やウェールズのブラックマウンテンのトレイルを歩いたり、ペンブローックシアの海岸でキャンプしたりと英国の自然と田園風景の美しさを堪能しました。また、今年からカレッジの学術委員会と予算委員会に大学院生の代表として加わっており、カレッジの運営について垣間見るといふ貴重な機会を得ました。

末筆ながら、このような充実した英国留学生生活を奨学金を通して支えてくださった BCJA の皆様に深く感謝しております。

(2004 年度 BCJA 奨学生、University of Oxford、法社会学)

2004 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[5]

東京、エセックス、オックスフォード：複数の政治理論と政治理論の複数性の理論

蛭田 圭

私は2004-5年にBCJA奨学生としてオックスフォード大学政治学・国際関係学科でMSc(政治理論研究)を修了した。現在は同学科にてDPhil(政治学)取得を目指し研究を続けている。それ以前にはエセックス大学政治学科、慶應義塾大学経済学部でそれぞれMA(イデオロギーと言説分析)とBA(経済学)を修了した。

過去のニューズレターを読むと①イギリスでの留学生活全般、②イギリスの大学の一般的諸特徴、③オックスフォード大学のカレッジやチュートリアルといった制度、のそれぞれについてかなり豊かな情報が既にあることが分かる。したがって以下では、上記3点の反復を避けつつ、私固有の体験を最小限の専門的知識を交えつつご報告したい。つまり、慶應、エセックス、オックスフォードというそれぞれ個性ある3つの大学を物理的に移動したことが、私の専門とする政治理論の研究に対してどのような効果を持ったかについてである。

意外に思われるかもしれないが、慶應からエセックスへの移動よりもエセックスからオックスフォードへの移動の方が私には困難であった。前者は経済学科から政治学科へ、そして日本の大学からイギリスの大学への移動である。それに対して後者は政治学科から政治学・国際関係学科へ、そしてイギリスの大学からイギリスの大学への移動である。それにもかかわらず、後者の方が困難であった。なぜか。

その答えはエセックスの政治理論とオックスフォードの政治理論がまったく異なる二つの知的伝統に属する点にある。つまり、前者はヨーロッパ大陸の哲学伝統(とりわけマルクス主義とハイデガー主義)に位置するのに対し、後者は英米分析哲学の伝統(とりわけロールズ主義)に位置する(そして残念なことに、二つの哲学伝統の間の相互不理解は驚くべきほど著しい)。対照的に慶應大学は、多くの日本の大学がそうであるように、多種多様な伝統の集合である。私は慶應大学で経済・社会思想史を専攻していたが、偶然にもドイツの経済・社会思想史を中心に研究していた。そのため、慶應大学からエセックス大学への移動は大陸哲学的伝統から大陸哲学的伝統への移動であった。いわばオックスフォードに移ることで、初めて私はドーヴァー海峡を越えたのである。

二つの哲学伝統の違いを際立たせるために、エセックスとオックスフォードの二つの政治理論での鍵概念をランダムに挙げてみよう。エセックスで頻繁に使用される鍵概念は例えば、包含、排除、欠如、言説、幻想、ヘゲモニーなどである。それに対してオックスフォードで頻繁に使用される分析概念は例えば、帰結主義、義務論、効用、合理性、適理性、公正さなどである。このように、「政治理論」と言っても二つの伝統では使われている言語が非常に異なっている。そして私の印象では、大陸哲学の言語と英米哲学の言語との隔たりは、日本語と英語との隔たりに勝らずとも劣らないほどである。したがってエセックスからオックスフォードへの移動は海峡の彼岸へと移ることのみならず、新しい言語の使い方を学ぶことでもあった。

待ち受けていたのは驚きの連続だった。まず第一に、私が政治理論だと思って学んできたものは実は政治理論などではなかったのだということを知られる。オックスフォードのオーソドックスな見解によると、政治理論が生まれたのは1971年のことである。この見解は1950-60年代の英米における「政治哲学の死滅」という文脈からきており、英米の政治理論家から見るともともと自然な見解である(ということをおはあとから学んだ)。だが、私にとってその見解は「自然」ではない。オックスフォード大学は英米分析哲学の最良の伝統を引き継いでいる。しかしそうであるが故に、それ以外の伝統に対してしばしば盲目的になりがちなのである。

もちろん、全てのオックスフォードの政治理論家たちが同じ見解を抱いているわけではない。また、私がオックスフォードに興味を持ち、指導を仰いだ先生方の多くは、オーソドックスな見解に様々なレベルで理論的挑戦を試みている人たちである。言い換えれば、オックスフォードの政治理論自体が一枚岩ではない。しかし支配的な見解は(私の眼から見ると)英米分析哲学の伝統に無自覚に偏向した

それであり、政治理論の修士課程プログラムはこの見解に基づいて組まれている。

その結果、私を含め、分析的伝統の外部から来た学生たちは大なり小なり違和感を抱くことになる。さらに、私たちは往々にして2つのことを同時に行うこととなる。つまり①実質的にはポスト1970sの英米分析政治理論でしかない学問を政治理論そのものとして学ぶこと、②ポスト1970sの英米分析政治理論が政治理論そのものであると認識されるに至った経緯と理由を理解しようと試みること。①は政治理論的であるのに対し、②はメタ政治理論的(理論の理論)である。さらに3つ目のオプションが潜在的に加わり得る。つまり、③ポスト1970sの英米分析政治理論のパラダイムに対して抵抗すること。

私自身は①、②、③の3つを行いながら、私の抱く違和感そのものに徐々に理論的インスピレーションを見出すようになっていった。東京、エセックス、オックスフォードを物理的に移動し、それぞれの大学で異なった学問のあり方があることを理論的にも実存的にも学んだという体験。複数の政治理論とのこの邂逅の体験にインスパイアされつつ、政治理論の複数性の理論の可能性を模索し始めた。部分的にはその帰結として、学位取得論文 *Concepts, Ideologies, and History* が出来上がった。

また、政治学科と政治理論コースのあり方について様々なチャンネルを通じて同学科と交渉を試みた。例えば、他学生たちと意見を交換し報告書を作成、それをしかるべき委員会に提出した。その甲斐あってか、今年度から政治理論の多様なアプローチに関する授業が新設されるなど、新たな動きも見られる。

ともすると私がオックスフォード大学の政治理論研究に不満であるかのように思われるかもしれないが、そうでは決していない。むしろ逆である。同研究科には様々な理論家があり、それぞれが多かれ少なかれ違う立場を持ち、異なった方法論を採用している。そしてそれぞれが自らの立場と方法論が理論的に防衛可能であり、かつ良いものだと考えつつも、理論的に防衛可能な立場と方法論が自らのものだけではないということもまた認めている。そして私たちは、異なる立場と方法論をもつ他者との絶え間ない理性的対話を通じて自らの立場と方法論の防衛可能性を高め、理性的批判を通じて互いに敬意を表するのである。オックスフォード大学の政治学科では常にそうした相互批判がおこなわれ、そのことが同学科を極めて生命力溢れる政治理論の研究所たらしめている。

そのような研究機関で修士を修めることができたことはとても光栄な、そしてとても幸運なことであった。そしてその幸運のひとつはもちろんBCJAからのご支援である。いただいたご支援は経済的にのみならず精神的にも大きな助けであり、なによりも大きな励ましであり勇気づけであった。心よりお礼を申し上げたいと思う。

(2004年度BCJA奨学生、University of Oxford、政治学)

英国留学レポート

ロンドン大学 コートールド美術研究所 壁画保存学部

角元直人

1. 英国での研究内容

2004年10月、ロンドン大学コートールド美術研究所(サマーセットハウス)にて3年間の壁画保存修士課程に進学し、現在私はその2年目を迎えたところです。壁画保存は科学、美術史、そして修復保存の理論と実践など多岐にわたる学際的な学問領域であり、コートールドは壁画に特化した保存修復コースを持つ英国唯一の学問機関で、また世界でも有数の壁画研究機関です。プログラムは3年に一度、8名ほどが受け入れられ、私のプログラムではアメリカ、イギリス、イタリアそして日本からなる合計6人で構成され、プロの壁画修復家養成のために密度の濃い、個人に重きの置いた教育が施されています。



Courtauld Institute of Art Somerset House, London
Photo: Courtauld Institute of Art

1年目はサマーセットハウス内にある研究所にて基礎科学、壁画材料・技術、保存理論と実践、美術史そして情報処理・管理の講義を中心に学びました。また、地下の実験室にてプロの壁画修復家から壁画保存実習の手ほどきを受け、レプリカ制作(左図)や、保存材料の実験などを行い素材への理解を深めました。現場研修としてはイギリス国内や(Winchester Cathedral, Canterbury Cathedral, Westminster Abbey, Durham Cathedral, London tower)、イタリアの(Firenze, Plato, Siena)の壁画を査察し、St. Paul CathedralやPlato(フィリッポ・リッピの壁画)などの修復現場を訪れ、また実際の作業研修として2005年5月から6月にかけてマルタの「勝利の聖母教会」天井壁画の修復作業にValletta Rehabilitation Projectの出資のもと従事致しました。



壁画レプリカ
中国敦煌莫高窟85窟の
仏陀像から
Photo: Naoto Kakumoto

プログラム2年目は中国敦煌莫高窟260窟における二ヶ月の実地研修から始まりました(2005年9月20日~11月10日)。これは敦煌研究所とコートールドの共同プロジェクトで、260窟は490数窟を超える莫高窟の中でも初期の部類に入る北魏時代(386-534)の壁画です。唐時代の壁画は数も多く、研究も多くなされているのですが北魏を始めとした初期の壁画は素材や壁画技術などにおいて未知の部分が多く、プロジェクトの成果はあらゆる分野で高く期待されています。今回は第一回ということで修復作業場所の設営から関連文献の収集まで準備に多くの時間が割かれ、同時に壁画自体の調査と劣化具合の予備調査、そして記録が行われました。英国へ帰国後は学部にて壁画劣化の環境要因、科学調査法、そして顕微鏡検査についての講義と実習を行い、現在(2005年12月)つかの間の休暇に入ったところです。年明けからは引き続き上記の講義と実習を、そして3月の試験の後、2006年4月から5月まで再びマルタの「勝利の聖母教会」天井壁画修復作業に従事する予定です。



左: 中国敦煌莫高窟260窟正面図
右: 260窟となりの259窟にて北魏壁画の比較調査をしているところ
Photo: Courtauld Institute of Art



2. 将来の展望

最終学年は中国敦煌莫高窟260窟壁画保存プロジェクト、そして他の壁画保存研修(現在ディレクターが財政的支援先を交渉中)に参加し、それと平行して個人研究プロジェクトとして修士論文の作成に入ります。現在、研究テーマを絞り込んでいる段階ですが、コートールドを卒業する初のアジア学生として、日本を始めとしたアジア全域の壁画群に特化した固有の問題(土材をベースとした壁画構造、またアジア壁画に使われた有機顔料に関する保存の諸問題等)をテーマとして選択したいと考えております。

3. 生活一般、余暇の過ごし方について

プログラムの性格上海外を行き来しており、壁画以外の学外の交流はあまり無い状況ですが、国際都市であるロンドンの生活を満喫しています。下宿先はロンドン北部のアーチウェイという場所にあり、台湾からの美術学生とフラットシェアをしています。学校があるストランドまではバスで1時間ほど、ダブルデッカー二階の最前列に座って本を読みながら通学するというのが日課です。イギリスの大学は午後5時あるいは6時に図書館などがしまってしまうところが多いかと思うのですが、私の学部は少人数というのもあり、24時間365日好きなときに来て好きなだけ研

上左端: 「勝利の聖母教会」、ヴァレッタ、マルタ正面図
上中央: 天井部の壁画剥離部分の応急処置をしているところ
上右端: マルタ大統領が現場に訪問された翌日に報道された記事。(私は洗浄作業をしている)
下左端: 壁画の一部分
下中央: 壁画の一部分
下右端: 壁画修復家、スティーブン・リカビーの指導を受けているところ。

究を続けることが出来、また私たちの講師も休日出勤し、夜中12時近くまで働いておられるので、学期中はほぼずっと学部内で過ごしているような状態です。クラスメイトとは研修などで常に一緒に行動を共にし、皆とても仲がよいので余暇もよく一緒に過ごしています。研修先のマルタでは修復作業後クラスメイトと滞在先前の海岸で海水浴をしたこと、敦煌の砂漠の中で皆とハイキングをし、たき火を囲んで夜を過ごしたことはいい思い出です。良き友人、信頼できる同僚と同じ夢に向かって苦楽を共に出来る非常に恵まれた環境にいる喜びを日々感じています。

4. おわりに

最後になりましたがBCJA奨学生として選んで頂き、支援を頂いた関係者の皆様にここで厚くお礼を申し上げます。異国での生活、経済的な困難、そして修士号所得まで3年という長い道のりで不安になることもあります。奨学金という形で皆様から支援を頂いたことは大きな励みとなります。貴重な経験を積ませて頂いていることを日々感謝しながら、英国滞在中に多くを吸収し皆様の支援に答えられるよう邁進致します。

(2004年度BCJA奨学生、London, Courtauld Institute of Art、美術保存)

2005年度BCJA会計決算報告書

2004年11月30日～2005年10月31日

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	1,655,322
会 費	12,000
借 入	40,000
利 子	9
合 計	1,707,331

支出の部

科 目	金 額
BC 郵送代	61,820
振込手数料	1,260
図書・通信費	54,202
アルバイト料	72,000
オフィス用品	3,303
BCJA 印刷代	35,437
返 済	40,000
合 計	286,122

2005年10月31日現在の資産状況

預金 (BCJA)	1,421,209	次期繰越分	1,421,209
-----------	-----------	-------	-----------

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	2,180
郵便振込	1,643,000
奨学金返還	150,000
利 息	1
借 入	210,000
合 計	2,005,181

支出の部

科 目	金 額
印字代	1,000
振込手数料	6,300
奨学金支給	1,650,000
収入印紙	200
返 済	210,000
合 計	1,867,500

2005年10月31日現在の資産状況

現金	81,800	次期繰越分	1,636,096
預金 (BCJA 奨学金)	55,881		

平成18年度BCJA奨学基金趣意書

BCJA 会員のご好意で、本年度も10名の新進気鋭の留学生が、英国において、勉学にいそしんでおります。大変な難関から選抜された有為な人材であり、必ずや大きな成果が期待できるものと信じております。

今後も、貴重な英国留学の道を確保するため、またこの留学制度に期待している若い諸君に希望を持ち続けていただくため、会員の皆様から、今回も、広くご賛同を賜りたいと願っております。

前回に引き続き、今年度も、より多くの会員の皆様からご賛同を得たいものと、郵便振込でのご送金とします。みなさまからのご厚志を心からお願い申し上げます。

記

一口 5,000円 二口以上で、お願い申し上げます。

郵便振込で、振込額、住所、氏名をご記入のうえ、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。なお、振込用紙は、本ニューズレターに同封させていただいたものをご利用下さい。

口座記号番号：00180-0-426794

加入者名：BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男 秘書 川崎
〒102-0082 東京都千代田区一番町3-3
ニッセイビル9F (株)ビーユー
連絡先 Tel: 03-5211-3855
Fax: 03-5211-3858
e-mail: yukio-s@mvno.co.jp

BCJAの銀行口座のお知らせ

金融機関名: UFJ銀行
支店名: 飯田橋支店 (664) (03) 3268-4131
科目: 普通
口座番号: 3654677
受取人名: BCJA 島津幸男

平成17年度BCJA奨学基金協賛者一覧

2005年10月31日現在

協賛者総数 88名 総額 1,643,000円
派遣者数 10名 奨学金総額 1,500,000円

協賛者氏名 (敬称略 五十音順):

青柳 昌宏	河本 直紀	西村 閑也
我妻 堯	小鍛冶 繁	能口 盾彦
阿部 和彦	児島 清	野城 真理
荒木 喬	児玉 昭太郎	野辺地 篤郎
荒木 俊一	小林 哲也	橋都 浩平
安西 徹雄	榎藤 興志夫	肥後 矢吉
安藤 眞之	斎藤 文良	肥田野 直
飯野 正光	塩田 洋	平野 敬一
池上 忠弘	島津 幸男	広本 勝也
石田 明	白川 正男	藤井 昭洋
石松 須美子	白鳥 令	細田 衛士
石渡 淳一	菅井 直介	松本 達郎
伊東 治己	諏訪部 仁	三浦 省五
稲垣 久雄	関谷 透	峰本 暉子
上田 五両	瀬在 幸安	宮澤 泰
宇佐美 誠二	平 孝臣	宮脇 富士夫
海老原 遥	高田 康成	武藤 春光
大野 吉弘	高柳 和夫	森 亘
小倉 暢之	田口 博国	森崎 久雄
小澤 保知	武内 重二	森田 青平
小田 朗美	田島 裕	森本 宏
勘米良 亀齡	田中 晋	山口 勝己
川本 敏	田中 典子	山口 隆美
河合 秀和	田中 亮三	山下 博
北 政巳	田邊 和子	山田 昭
北川 正信	千葉 恵	吉田
木下 良樹	中川 威雄	吉田 徹夫
木村 精二	中島 章	米澤 勝衛
桐敷 眞次郎	長澤 泰	
倉持 三郎	西田 宏子	

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先: ビーシージェイエー (BCJA)

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ <http://www.bcja.net/>では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内、掲示板などがご覧になれます。より良いサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。(メールアドレス m-aoyagi@aist.go.jp まで)

[編集後記]

BCJA ニューズレター22号では、BCJA 英国留学奨学金2005年度選考結果報告、2002年度および2004年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告7件、会計報告などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。

本レターへの寄稿が最近激減しております。皆様の研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情、留学体験談など、よろしくご投稿をお願いいたします。一度、原稿をお送りいただきました方々にも、続報をぜひよろしく願います。また、特集テーマ、原稿依頼の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的に寄せいただければ幸いです。なお、本レター発送については、会計担当の島津様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, m-aoyagi@aist.go.jp)